

源氏物語の愛の系譜

——非充足の美学をめぐる——

沢田 正子

源氏物語の愛の美学はその基調を非充足性への志向に求めることができる。

満たされぬ愛を求めて、永遠の女性を求めて彷徨をかさねてゆく、それは竹取物語以来の伝統的な愛の系譜である。⁽¹⁾ かぐや姫を、あて宮を、高貴な后たちを求めてむなしくさまよう人々、それは白鳥説話、異郷説話等の類型に則したもので、非充足の愛の充足化をはかって苦悩する人々の姿は愛の美学の典型ともいえ、非充足感が強いほど悲しみの美学はより陰影深く綴られることになる。

源氏物語——そこには愛の諸相がくまなく尽くされているといわれるが、ここに登場する作中人物たちもまた確実にその伝統の中に据えられている。ここに語られる諸々の愛の中で完全に充足されているものはほとんどなく、かりにあったとしても主題や主筋とは無関係であったり、次に予定されている非充足の前提であったりする場合が多い。⁽³⁾

光源氏は晩年その生涯を顧みて次のように述懐する。

みづからは、をさなくより、人に異なるさまにて、ことごとくしく生ひ出で、今の世のおぼえ、有様、きしかたに、たぐひ少なくなありける。されど又、世にすぐれて悲しき目を見るかたにも、人にはまさりけりかし。まづは、思ふ人に、さま／＼おくれ、残りともれる齢のするにも、「あかず悲し」と思ふこと多く、あぢきなく、さるまじきことにつけても、あやしく、物思はしく、心に飽かずおぼゆること添ひたる身にて、過ぎぬれば、「それにかへてや、思ひし程よりは、今までも、ながらふるならん」と、思ひ知るゝ。

〈若菜下・三五七〉

発病寸前の紫上を相手にしてのつくづくとした感懐であるが、彼の生涯は外面の栄花とはうらはらに「あかず悲しと思ふこと」「心に飽かずおぼゆること」のみ多く、内面の苦しみ、心理的非充足感の連続の層の中にあつたともいえるわけである。

そもそも光源氏の物語の序曲ともいえる桐壺の物語も身分という宿命に呪縛されたむなしさに基づくものであつた。

いとあつしくなりゆき、もの心ほそけに里がちなるを、いよ／＼あかずあはれなるものに思ほして

〈桐壺・二七〉

。女御とだに言はせずなりぬるが、飽かず口をしう思さるれば、「いま、一きさみの位をだに」と、贈らせ給ふなりけり。

〈桐壺・三三三〉

「あかぬ」思いの中に果てた愛、父母の宿命をそのまま担うかのように光源氏もまた生涯を満たされぬ思いを求めて彷徨する。彼の愛の源泉が藤壺とのそれにあることはもちろんであるが、多くの女君たちとの物語はそのほとんどがみな一様に充足されぬ層の中に築かれているのである。

最初の妻、葵上、それは藤壺の影の背後にあつてどうしても愛を見出せなかつた人であるが夕霧の誕生を契機として不思議な思いが芽生える。病床の妻を目にして「としごろ、何事を飽かぬ事ありて思ひつらむと、あやしきまでうちまもられ」〈葵・三三八〉、またこれまであまりにもよそよそしかつた葵上も「いと清げに、うちさうぞきて」参内する夫の姿を「常よりも目とゞめて見出して、臥し給」〈葵・三三八〉うのである。しかしこのつかの

間の充足も死の前兆でしかなかった。ほのかな愛にめぐり会おうとする瞬間、それは彼の手中からふっと消えてしまふ。彼女に対し誠意を尽くすことのなかった光源氏の心には失われたものの重みが残るのみである。

同じく死によつて愛の終焉を迎える夕顔、そして、自らの怠りで伊勢に去らせてしまつた六条御息所、彼女たちへの結ばほれた思いは光源氏の生涯に「あかぬ思い」の影をおとすのである。

こうした、妻、愛人として外的には何の制約もない人々に対して、はじめから不可能な制約のもとにおかれているのが藤壺、空蟬、朧月夜などである。人妻、さらに継母という二重の禁忌を背負う藤壺への思慕(後述)、そして受領の後妻の空蟬、春宮妃候補(後の尚侍)の朧月夜、それぞれその愛の前に制約があり思いを充足させることはできない。空蟬の場合など身分柄、光源氏の力でタブーを破ることはたやすいが、

。「とてもかくても、今は、いふかひなき宿世なりければ、無心に、心づきなくて、止みなん」と、思ひはてたり。

〈帝木・一〇五〉

〈空蟬・一二〇〉

と自らの意志で愛を葬つてゆく空蟬の苦しみを認め、非充足感を残しながらそれを認めざるをえないやさしみも忘れてはいない。

これに対し全くの下燃えに終つたのが朝顔、玉鬘、梅壺女御、等である。朝顔とは遂にみやびな贈答のみに終始し未知の世界への軽いうずきのような思いを残すが、養女という立場の人々へのそれは光源氏の中年期の軌跡として、情熱のままに赴いたかつてとは異なつた筆づかいの中に描かれてゆく。ことに玉鬘の場合、ほのかにしてしのびがたいようないたみはこの十帖の花やぎの絵巻に快いかげりを添えている。外界が明るいだけに遂げずげられぬことのない愛を強いて黙殺してゆく光源氏の年令、分別の介在は青春期の残照のような淡い悲しみを添えている。

真木柱の巻、玉鬘が鬘黒のもとに去つた後、次のような一文がある。

三月になりて、六条殿の御前の藤、山吹のおもしろき夕ばえを、見給ふにつけても、まづ、見るかひありて居給へりし御

さまのみ、思し出でらるれば、春の御前をうちすて、こなたにわたりて、御覽ず。呉竹のませに、わざとなう咲きかゝりたる匂ひ、いとおもしろし。「いろに衣を」など、の給ひて、

思はずに井手の中道へだつともいはでそこふる山吹の花

〈真木柱・一五二〉

光源氏は春の御殿を、「うちすて、」東の町の西の対に渡り主なき宿の庭のたたずまいに見入る。手に近くあるときは何がしかの夢があつた。がそれがなくなつた今、彷彿と過去の思い出がむなしさを伴つて吹きあげ、華麗な六条院世界に投げかけられた一筋のかけりは、その青春の終焉を告げるかのようないたみを残すのである。

彼の生涯の中で非充足感を伴わなかつた愛、それは花散里、末摘花、明石上ぐらいであろうか。たしかに彼女たちには何の制約もなく、ことに、

二条院とて、つくりみがき、六条院の春の御殿とて、世にのゝしり給ふ玉の台も、たゞ、ひとりの御末のためなりけり。

〈匂宮・二二二〉

と記される明石上などは充足そのものの感もあるが、身分という宿命的制約の中で自虐的なまでに自らを殺して生きたこれまでの道程を見ると、彼女の側からはまさに満たされぬ思いの連続であつた。そして光源氏にとつてもそれを思いはかる用意は十分にあつたはずである。

花散里や末摘花の場合も、女性の側から見れば充足した愛の対象ではなかつたという心残りがある。しかし花散里の場合、

たゞ、御心さまの、おいらかにこめきて、「かばかりの御宿世なりける身にこそあらめ」と、思ひなしつゝ、ありがたきまで後やすくのどかに物し給

〈薄雲・二二三〉

いて、「おほかた、何やかやとも、そばみ聞え給はで」〈螢・四二九〉「世をつゝまじげに思ひて」過ごし、いわば自らの心で非充足の充足化をはかつたわけで、お互いにある程度の限界をわきまえて、その範囲の中でささやかな満足を見出しているわけである。この点、花散里の造型は光源氏の愛の物語の中でも特殊な存在であり、ひとつの救いであつたかもしれない。⁽⁵⁾

一輪々々の花は光源氏にとってそれぞれの美しさをこめて咲くが最後まで何の障害もなく咲きおさせたものはほとんどない。時々の障害の中に折れ、消え、うずもれ、その都度悲しみの色を増してゆく。光源氏の生涯はそうした非充足感に由来する悲しみの美学に彩られていたといっても過言ではない。そしてこれに光源氏一人ではなく後の柏木も薫も、その他の脇役たち——朱雀院や夕霧等——にも課せられている宿命的課題なのである。つまり源氏物語全体が非充足の愛の集積のうえに成り立っているともいえるわけであるが、ここではそうした美学の実態を解明するために光源氏の愛の核心ともいえる藤壺の物語及びその愛の充足化のひとつの方法であるゆかりの問題——紫上造型——について考察してゆきたい。また、比較の意味で光源氏亡きあとの薫の場合についてもふれておきたいと思う。

二

光源氏の青春期に次々と展開される恋物語はその発端に偶発的な状況設定を伴うことが多い。⁽⁷⁾ 五条の中宿りの夕顔、紀守邸での空蟬、北山の若紫、後宮の局での朧月夜、それぞれ一回限りの偶発的な場面が用意され、そこから新しい物語が展開するのであるが藤壺物語の開始にはそれが無い。

とりどりに美しいが、みな「うちおとなびた」る御方々の中にあつて、「いとわかう美しげにて、せちにかくれ給へど、おのづから漏り見」(桐壺・四六)える藤壺の姿に光源氏は少年の夢を託する。母親の「影だに思えぬ」彼は、「いとよう似たまへり」という内侍のすけのことに専らされるように、

わかき御心地に「いとあはれ」と思ひきこえ給ひて、「常に、まゐらまほしう、なづさひ見たてまつらばや」

〈桐壺・四六〉

と思ひ初め、父帝のことばもあつて花紅葉の折にふれては「心ざしを見えたてまつり、こよなう心よせ」(同・四七)ることになる。葵上と結婚しても、

心の中には、たゞ藤壺の御ありさまを、「たぐひなし」と思ひきこえて、「さやうならむ人をこそ見ぬ。似る人なくもおはしけるかな」

〈同・五〇〉

と「幼きほどの御ひとへ心にかゝりて、いと苦しきまで」〈同・五〇〉思慕をつのらせてゆくのである。藤壺物語の開始は偶発的な場面設定など必要のないごく自然の成行に基づくもので、これが他の女君の物語の語りはじめとの基本的相違である。晩年、紫上の没後、彼は明石上を相手にさまざまの回想を綴る中に、藤壺について、

おほかたの世につけて、をかしかりし御有様を、をさなくより見たてまつりしみて、さるとちめの悲しさも人より殊におぼえしなり。

〈幻・二〇五〉

といているが、光源氏の藤壺への愛の始発はまさに「をさなくより見たてまつりしみて」の一言に尽きるわけである。

その生涯を支配するともいえる物語はかくして始められた。が、

人の際まさりて、思ひなしめでたく、人も、え貶しめ聞え給はねば、うけばりて飽かぬことなし。

〈桐壺・四六〉

という充足そのものの藤壺の存在は光源氏の心に永遠の非充足の愛の重荷を課したのである。彼女は光源氏にとつてまさに理想人であり、天上の人であったが、何よりもその前に父の後であり自らの継母であり、この非情な制約こそが彼の憧憬を盲目的にかりたててゆく原因ともなったのである。もし彼女が、いかなる理想性を備えていようと、乳母子であつたり単なる深窓の姫君であつたら、いわばその手のとどく存在であつたら、恐らくこれほどの執着はもたなかつたであらう。藤壺が光源氏にとつて真の永遠の人になりえた理由は、一つに高貴性、内的、外的双方の理想性、一つに幼いころよりの親睦、そしてもう一つには禁忌の人である、という宿命的設定であり、これが非常に重い意味をもつわけである。（この点、当時者の内面、意志のみが愛の充足を阻んだ大君の場合と基本的に異なるところである。）

もちろん藤壺の魅力、理想性はあらゆる場をかりて主に光源氏の目を通して語られてゆく。さきに見た「藤壺の御ありさまを、たぐひなし、と思ひきこえて」「似る人もなくおはしけるかな」という少年の日の鮮烈な印象

をはじめとして、帚木の巻、例の品定め最後の最後にある、

(1)君は、人ひとりの御有様を、心のうちに思ひ続け給ふ。「これに足らず、又、さし過ぎたることなく、物し給ひけるかな」とありがたきにも、いとど胸ふたがる。
 〈帚木・八六〉

という青年期初期の心象、そして、

(2)いみじき御気色なるものから、なつかしうらうたげに、さりとして、うちとけず、心ふかう恥づかしげなる御もてなしなどの、なほ人に似させ給はぬを、などか、なのめなることだに、うち交り給はざりけん」とつらうさへぞ、おぼさるゝ。
 〈若紫・二〇五〉

(3)けだかう、恥づかしげなるさまなども、更にこと人とも、思ひわきがたきを、猶、限りなく、昔より思ひしめ聞えてし心の思ひなしにや、「さまことに、いみじうねびまさり給ひにけるかな」と類なくおぼえ給ふに、
 〈賢木・三八五〉

というあやにくな逢瀬の折の実感、また、

(4)いにしへよりの御有様を、おほかたの世につけても、あたらしく愛しき、人の御様を、……(死別を)いふかひなくおぼさるゝ事、限りなし。
 〈薄雲・二二〇〉

(5)ひとかたならず心深くおはせし御有様など、つきせず、恋ひきこえ給ふ。
 〈薄雲・二二九〉

(6)もて出でゝらうくしき事も、見え給はざりしかど、いふかひあり、思ふ様に、はかなきことわざをもしなし給ひしはや。世にまた、さばかりのたぐひありんや。やはらかにおびれたる物から深う由づきたる所ならばなく物し給ひしを。
 〈朝顔・二六七〉

等、その死及び死後の回想の中の言及。いずれも、「たぐひなし」「似る人もなし」「ありがたし」「ならびなし」「ひとかたならず」「さまことに」等、唯一無二の理想性がとかれてゐる。こうした絶対的理想性への追求が藤壺思慕をより永遠なるもの、より憧れ深いものにしてゐるのであるが、この愛をさらに陰影深く美しく演出するのが、さきにもふれた禁忌の人という絶対的制約である。光源氏から藤壺へのなかば盲目的な思慕の間隙を縫うように綴られる制約下の苦しみ、満たされぬ心の重み——とくに藤壺の側からのそれも含めて——がこの非充足の愛の美学をより純化し見事なものに醸成してゐるのである。

(7) れいの明けくれ、こなたにのみおはしまして、御遊びも、やうくをかしき空なれば、源氏の君も、暇なく召しまつはしつゝ、御琴、笛など、さま／＼に仕うまつらせ給ふ。いみじうつゝみ給へど、しのびがたき気色の瀧り出づるをり／＼宮もさすがなる事も多くおぼしつゞけり。

〈若紫・二〇八〉

光源氏との逢瀬の後、懐妊した藤壺は程たつて参内するが何も知らぬ帝は二人を相手に管絃の遊びに興ずる。しのびながらもふとした折にもれる光源氏の思い余る気色に、藤壺もさすがにあわれを禁じえない。まさに背水の陣の二人であるが、彼からの一方的な愛のみではなく藤壺の側にも苦しみながらもそれに応える用意のあることはこの場面の抒情をよりあわれ深いものになっている。

(8) まちとりたる楽の、にぎはしきに、かほの色あひまさりて、常よりも、光ると見え給ふ。……藤壺は、「おほけなき心なからましかば、まして、めでたく見えまし」と思すに、夢の心地なんし給ひける。

〈紅葉賀・二七二〉

(9) つとめて中将の君、

「いかに御覧じけむ。世に知らぬみだり心ちながらこそ、

物思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の袖うちふりし心知りきや あなかしこ

とある。御返り、目もあやなりし御さまかたち、見給ひ、忍ばれずやありけむ

唐人の袖ふることは遠けれど起ち居につけてあはれとは見き 大方には

とあるを、かぎりなうめづらしう、

〈紅葉賀・二七三〉

前は藤壺の御前で行われた青海波の試楽の折、不吉なほど美しい光源氏の姿は人々の目を奪うが、藤壺の心にも思わず「何もない人であつたら……」という苦悩がはしる。後はその翌日の彼からの贈歌であるが、あの姿を見てさすがに彼女も忍ぶことができず返歌をおくる。光源氏の歌の中の「袖うちふりし」、また藤壺の返しの「袖ふることは」にはあの大海人皇子と額田王の悲恋、「あかねさす紫野ゆき……」「人妻ゆえに……」の贈答が彷彿とするのである。

(10) さては、藤壺の三条の宮にぞ参り給へる。今日また、「ことにも見え給ふかな。ねび給ふまゝに、ゆゝしきまでなり給ふ

御有様かな」と人々めで聞ゆるを、宮、几帳の隙より、ほの見給ふにつけても、おもほす事、繁かりけり。

〈紅葉賀・二八一〉

（川かうやうの折にも、まづこの君を、光にしたまへれば、帝もいかでか疎に思されん。中宮、御目のとまるにつけて、「春宮の女御の、あながちに憎み給ふらむも、怪しう、わが、かう思ふも、心憂し」とぞ、みづから思しかへされける。

大かたに花のすがたを見ましかば露も心のおかれまじや

〈花宴・三〇四〉

宮中参賀、花の宴、同じく晴れの場での彼の姿に内心の動語を禁じえぬ藤壺の心象であるが、制約下の苦しみが女性(9)の側からも感懐深く綴られ非充足感がきわめられているところにこの不倫の愛の美しさがこめられているのである。

ところで光源氏の藤壺への希求は不変のものであるが、実際には折々の人生のふしめを経ていくつかの変貌が認められる。

子 正 田 沢

まず桐壺院の死に臨み藤壺は春宮の未来にかけて光源氏との愛を断つこと、すなわち出離の道を選ぶ。その死より翌年の出家までの間彼女の心には強い母性が彼への愛に先行して行く。いや先行するというより自らの意志(10)でそれを葬ろうとするのである。

（何なほこのにくき御心の止まぬに……今更に又、さる事の聞えありて、わが身はさるものにて、春宮の御ためにならずよからぬこと出で来なん。……この事、思ひ止ませたてまつらむ。

〈賢木・三八三〉

（春宮の御ためを思すには……「かゝること、とだえずば、いとどしき世に、うき名さへ、もり出でなん……」

〈賢木・三八八〉

さらに出家後も、

（我が身をなきになしても春宮の御世をたひらかに、おはしまさば」とのみ思しつゝ、御おこなひたゆみなく勤めさせ給ふ。

〈賢木・四〇五〉

等とある。一方の光源氏もこの決断には不如意ながらも従わざるを得ず、二人はその愛の充足に対する新たな障

害と制約——春宮への愛、故院への贖罪——を前にひとつの転換期を迎えることになる。

④入道の宮よりも、「物の聞えやまたいかゞとりなされん」と、わが御ためつゝまじしけれど、忍びつゝ、御とぶらひつねにあり。「昔、かやうに、あひおぼし、あはれをも見せ給はましかば」と、うち思ひ出でたまふに、「さも、さま／＼に心をのみ尽くすべかりける、人の御契りかな」と、つらうおもひきこえ給ふ。

〈須磨・一二〉

⑤かき御簾の前に、おまし参りて、御みづからきこえ給ふ。東宮の御ことを、いと、後めたきものにおもひ聞え給ふ。かたみに、心ふかきどちの御物語、はた、万あはれまさりけむかし。懐しうめでたき御けはひの、昔にかはらぬに、つらかりし御心ばへも、かすめ聞えさせまほしけれど、「いまさらに、うたて」とおぼさるべし。我が御心にも、中／＼今一きは、乱れまさりぬべければ、念じ返して、

〈須磨・二四〉

須磨退去を前に藤壺よりのとぶらい向、及び別れの場面⑥である。これまでになく親しい思いに接するにつけ「昔、かやうにあひおぼし、あはれをも見せ給はましかば……」と過去への口惜しさがこみあげるが、藤壺はすでに俗界の人ではない。光源氏の手を離れたことよってはじめて生まれた親しみである。父の後、継母という厳しい制約の中での離れに対し、出離の人としての近しみ、ともに非充足の愛のきわみであるが、後者の場合、これまでの道程の重みを担って一汐の感懐がある。

そしてこの愛の軌跡は須磨退去から帰京、藤壺の死をめぐつてさらに強く確認されることになるのである。

⑥入道の宮にも、東宮の御事により、おぼし嘆くさま、いと更なり。御宿世のほどをおぼすには、いかゞ浅くは思されん。年頃はたゞ、物の聞えなどのつゝまじきに、「すこし情ある気色みせば、それにつけて、人の咎め出づることこそ」とのみ、ひとへに思し忍びつゝ、あはれをも、おほく御覧じ過ぐし、すく／＼しう、もてなし給ひしを、……あはれに恋しうも、いかでか思し出でざらむ。御かへりも少しこまやかにて、

〈須磨・三三〉

⑦院の御遺言にかなひて、うちの御後見つかうまつり給ふこと、年ごろ、おもひ知り侍る事おほかれど、「なに／＼つけてかは、その、心よせ殊なる様をも、もらし聞えん」とのみ、のどかに思ひ侍りけるを、いまなん、あはれに、口惜しく、

〈薄雲・二二九〉

須磨よりの光源氏の文を見ての心、また死を前にしての彼への述懐であるが、様々の制約の中にその愛を受け入

れることのできなかつた苦しみが、そしてその厚志に対して謝意を尽くすことのできなかつた悲しみが吐露されている。光源氏の愛はむなしなものではなかつた。藤壺にそれを受けとめ認める用意があつたことはこれまでも見た通りであるが、彼はそれを最期に臨みその人の口ずから確認することができたのである。二人の愛を充足させるには制約が多すぎただけであつた。その確信は藤壺の死後も永遠の思慕を捧げる力を光源氏に与えることになり彼一人の孤独の世界に築かれることの多かつた非充足の愛は二人の共有のものとして今後もし生き続ける足場を得るのである。

三

藤壺との愛は充足されえぬところに非常な美しみがあつた。それでは非充足の愛のある意味での充足化の方法ともいえるゆかりの問題はどうなるのであるうか。ここではこのことを少しく考えてみたい。⁽¹¹⁾

ゆかりによつて非充足の愛が満たされた場合、正身への愛の美学は崩壊することにならう。紫上は後の落葉宮や浮舟とは異なり、ゆかりとして完成しさらに永遠の女性として昇華したと説かれて⁽¹²⁾いるが、彼女はほんとうに光源氏の心に完全なる充足感を与えたのであろうか。

藤壺の没後、「おなじはちすに」(朝顔・二七)と阿弥陀仏を心にかけて念ずる彼は紫上の没後も「今は、蓮の露も、異事にまぎるまじく、後の世を、とひたみちに思したつこと、たゆみなし」(御法・一九二)とあり、光源氏の心の中に二人の区別はない。それではなぜ同じゆかりの女三宮の降嫁などを承引したのか。また、ゆかりの人に完全にとつてかわられた藤壺の存在はどうなるのか。

このような疑問を解くために、まず登場の初期の方から紫上造型のあとを辿つてみたい。⁽¹³⁾

周知の通り彼女は北山で光源氏に見初められるが、それは女君とか愛とかの対象ではなく恋しい人の面影を写している子供、童女、としての印象が強い。当時の年令からしてそれほど子供っぽくあるべくもないが、

。いで、あな、をさなや。いふかひなう、ものし給ふかな。

。いと、はかなうものし給ふこそ、あはれに、うしろめたけれ。かばかりになれば、いと、かゝらぬ人もあるものを。

〈若紫・一八五〉

という尼君のことばにもあるようにとにかく年令以上に頑是なく設定されている。この幼き、無邪気さは光源氏の紫に対する保護者的立場をごく自然に納得させるのに効を奏しているが、この姿勢は以後の紫上造型の基調としてやや久しく変わることはない。光源氏は僧都にはじめて心をうちあける時、次のように言う。

(1)あやしきことなれど、幼き御後見にもおもほすべくきこえ給ひてむや。……「まだ似げなき程」とつねの人に思しなずらへてはしたなくや、

〈若紫・一九〇〉

また尼君に対しても、

(2)あはれにうけ給はる御有様を。かの過ぎ給ひにけむ御かはりに、おぼしないてんや。いふかひなき程の齢にて、むつまじかるべき人にも立ち後れ侍りにければ、あやしううきたるやうにて年月をこそ、重ね侍れ。「おなじさまにもものし給ふなるを、たぐひになさせ給へ」といと聞えまほしきを。

〈若紫・一九四〉

とあり、自分と同じ孤児の立場の若紫を、亡き母上の「御かはり」に後見したい、世の常の懸想人ではない、ということ強調する。これは幼い少女を譲りうける際の口実ととれないこともないが、後、尼君が没した折、

(3)うしろめたげに思へりし人も、いかならむ。をさなき程に恋ひやすらん、故御息所に後れたてまつりしなど、はかぐしからねと思ひ出で、浅からずとぶらひ給へり。

〈若紫・二二三〉

と、自らの母を亡くした日を思いおこししみじみと慰問しているところや以後の彼女への心づもり等よりかなりの誠意を認めてもよいであろう。

(4)ひめ君は、なほ、時／＼思ひいで聞え給ふ時、尼君を恋ひきこえ給ふをり多かり。……こゝかしこの御いとまなくて暮るれば出で給ふを、したひ聞え給ふをりなどあるを、いとらうたく思ひ聞え給へり。二三日、内裏にさぶらひ、大殿におは

する折は、いといたく屈しなどし給へば、心苦しうて、母なき子持たらん心地してありきも、しづ心なくおぼえ給ふ。

〈紅葉賀・二七六〉

(5)「つれづれにて、恋しと思ふらんかし」と忘るゝをりなけれど、たゞ、女親なき子を置きたらむ心地して、みぬ程、うしろめたく、

〈葵・三四八〉

(6)いで入り給ひしかた、より居給ひし真木の柱などを見給ふにも、胸のみふたがりて、ものを、とかく思ひめぐらし、世にしほじみぬる齡の人だにあり、まして、なれむつび聞え、父母にもなりつゝ、あつかひ聞え、おほし立てならはし給へれば、にはかに引き別れて、こひしう思ひ聞え給ふ、ことわりなり。

〈須磨・三三二〉

順に二条院に引きとられてまもなくの頃、左大臣邸で葵上の喪にこもっている折、須磨退去のころであるが、それぞれゆかりの女君としてより光源氏の庇護下にある幼い子供、少女としてのイメージが強い。(4)にみるように彼は尼君からその役目を継承したことになり、紫上にとっては夫である前に父であり母であったわけである。

子 もちろん彼女が終始子供であったはずもなく次第に理想の女君としての成長も記されてゆくのであるが初期のころの印象はかなり強いイメージをもって以後の紫上造型に反映してゆく。

田

それでは初期においてなぜこれほどに幼さが強調されねばならなかったのか。そのことを考える場合どうしても藤壺とのかかわりが問題となるように思う。すなわち藤壺が尼として完全に彼の手中から離れるまでの間、紫上にくりかえしその幼さがとかれる必要があったのである。それは葵の巻の末での結婚の後にも変わることなく、たとえば、賢木の巻、藤壺の最終的拒絶にあつて絶望し思わず出家を思いたつたときにも、

(7)この女君のいとらうたげにて、あはれにうち頼み聞え給へるを、振り捨てん事いとかたし。

〈賢木・三八七〉

と彼の傘下に身をよせるあわれな若君のイメージが残るのである。

すなわち紫上は、少なくともその初期のころは藤壺のイメージとかさなることのないよう、決して対抗者、ライバルとなることのない次元で造型されているのである。この点、後の落葉宮や浮舟が本意の人と年令、環境などが近い条件にあつたことと対照的である。ところで例の紅葉賀の巻の青海波の折には、

色く散りかふ木の葉の中より、青海波の輝き出でたる様、いと、おそろしきまで見ゆ。……この世のことゝも思えずもの、見知るまじき下人などの、木のもと、岩がくれ、山の木の葉に埋もれたるさへ、少しものゝ心知るは、涙おとしけり。承香殿の御腹の四の御子、まだ、童にて、秋風楽舞ひ給へるなん、さしつぎの見物なりける。これらに、おもしろさ、尽きにければ、他事に目もうつらず、かへりては、ことさましにやありけん。

〈紅葉賀・二七四〉

と主人公の美質と対抗することのない次元で、それでいて自身の価値は十分に評価されるという端役(四の御子)が用意されているが、これと同様な手法が藤壺と若紫の場合にも認められるのではなからうか。

紫の没後、光源氏は明石を相手に生涯を回想することがあるが、その中で次のように言う。

(8)年経ぬる人におくれて、心をさめん方なく、忘れ難きも、たゞかゝるなかの悲しさのみにはあらず。をさなき程より、生ほしたてし有様、もろ共に老いぬる末の世にうち捨てられて、我が身も、人の身も、おもひ続けらるゝ悲しさの、堪へがたきになむ。

〈幻・二〇六〉

明石上への思惑もあろうが、「をさなき程より」という表白は紫への追悼の思いとして偽りのないものである。すなわち幼さ、彼の慈愛という出発にあってはじめて彼女は藤壺の形代として生きのびる道筋を得たのである。そして始発におけるこのような基本的条件を幾度も確認された後、紫上は次第に女君としての成長も記されてゆく。

〈賢木・三九四〉

(9)女君は、日頃の程にねびまさり給へる心地していといたうしづまり給ひて、
 御女君もかひなき物におぼし捨てつる命、うれしう思さるらむかし。いとうつくしげにねびとゝのほりて、御物おもひの程に所せかりし御髪の少しへがれたるしのみみじうめでたきを、

〈須磨・九四〉

(10)女君、廿七八にはなり給ひぬらむかし、さかりに清らに、ねびまさり給へり。すこし程へて、みたてまつるは、「又この程にこそ、匂ひくはゝり給ひにけれ」と見え給ふ。

〈玉鬘・三五六〉

(11)をんなもねびとゝのひあかぬことなき御様どもなるを、

〈野分・四六〉

と、巻を經るに従い「ねびとゝの」った姿が記されていくが、これは賢木の巻、

かんざし、頭つき、御髪のかゝりたるさま、限りなき匂はしきなど、たゞ、かの対の姫君に違ふ所なし。……更にこと人も、思ひわきがたきを、猶、限りなく、昔より思ひしめ聞えてし心の思ひなしにや、「さまことに、いみじうねびまさり給ひにけるかな」と類なくおぼえ給ふに、

〈賢木・三八五〉

久々の逢瀬で二人の酷似に驚きながらもなお藤壺の「ねびまさ」った姿に類なさを覚えた光源氏が、その当時の紫には見出せなかつた部分が見事に補足されていることになる。容貌の類似とともに成熟した美しさも加わり彼女はまさに藤壺のゆかりとして大成したかに見える。

しかし紫上は光源氏の藤壺への非充足の思いの一部を充足させたかもしれないがすべてを満たしたわけではない。薄雲、朝顔の巻付近を境に紫がこれまでと違った変貌を上げていくことはたしかであるが、しかし彼女はあくまで身代り、代用であつて藤壺没後といえども完全にその人になりきれたわけではない。それは折にふれて綴られる思慕の思い(後述)、そして何よりも朝顔の巻にみられる二人の精神世界の隔絶の中に窺えるのである。

よく引かれるところであるが朝顔の巻、光源氏が紫上を相手に、女性論の中で藤壺のことにふれるとその夜の夢の中で藤壺から恨み事をいわれる。ゆかりの紫上すら光源氏世界に自らと対等に位置することを許さぬ彼女の情念ともいわれるが、彼自身の側もそれを認めそれに応える姿勢を忘れてはいないのである。その少し前、

（朝顔へ）
 いかむざし、一面やうの、恋ひきこゆる人の面影に、ふとおぼえて、めでたかりければ、いさゝかわくる御心も、とりかさね
 べし。

〈朝顔・二六九〉

と紫上をゆかりとして再認識し彼女によって亡き人への思いの充足化をはかろうとしながらも、その夜居室に入っても「みやの御事を思ひつゝ大殿籠れる」光源氏なのである。藤壺の夢を見て、その恨み言にはっとして、思わず、

（44）「御いらへ聞ゆ」とおぼすに、おそはるゝ心地して、女君、「こは、など、かくは」と、の給ふに、おどろきて、いみじく

口惜しく、胸の、置きどころなく騒げば、おさえて、涙も流れいでにけり。今も、いみじく濡らし添へ給ふ。女君、「いかなる事にか」とおぼす。うちも身じろがで、臥したまへり。

とけて寝ぬ寢覚さびしき冬の夜にむすば、れつる夢のみじかさ

「なか／＼あかず悲し」と思すに、とく起き給ひて、「さ」とはなくて、ところ／＼に、御誦経などせさせ給ふ。

〈朝顔・二七〇〉

夢に襲われた光源氏にかたわらの紫上は、「こは、など、かくは」といぶかる。しかし彼はそれには答えず夢のはかなさを恨み、「胸の置きどころもなく」涙を流す。事情を知らぬ紫は、「いかなることにか」と戸惑うのみであるが、彼は無言で恋しい人の夢を追い続け翌日は、「とく、起き給ひて」寺々にそれとなく藤壺鎮魂の誦経をさせるのである。

紫上の物語においてこれほど残酷な場面はなからう。彼女はまさに人形、形代であり、精神のない肉体にすぎない。光源氏と藤壺の世界から確実に阻害され、しかもそのことを知らないのである。朝顔との一件でこれまでにない苦悩を乗り越え、ようやく彼の愛を信じて平静をとり戻した時だけにこの場面の彼女の姿はあまりにもあわれで痛ましいものがある。すでに見たように光源氏は藤壺の死に臨みその愛を確認している。そして今、「なに業をして、しるべなき世界におはすらんを、とぶらひ聞えにまうで、罪にもかはり聞えばや」〈朝顔・二七〇〉とつくづくと思ひやり、後世は「おなじはちすに」と折るのみなのである。乙女巻という六条院世界の開始を告げる新しい巻の直前に位置し、第一部前半のとりじめともいえる朝顔の巻の、その最後におかれた場面の意味は重いのである。そして折にふれ、

御このさかりにいどみ給ひし女御、更衣、あるはひたすら亡くなり給ひ、あるは、かひなくて、はかなき世にさすらへ給ふ

もあべかめり。入道の宮などの御よはひよ、

〈朝顔・二六一 女五の宮のもつて源典侍に遭遇した折〉

御きさき、待ち喜び給ひて御対面あり。いといたうさだすぎ給ひにける御けはひにも、故宮を思ひ出できこえ給ひて、「かくながくおはしますたぐひも、おはしける物を」とくちをしう思す。 〈乙女・三一九 弘徽殿太后と対面の折〉

「故入道の宮、おはせましかば、かゝる御賀など、われこそ、すゝみ仕うまつらましか。何事につけてかは、心ざしをも、見えたてまつりけん」と、あかざ口惜しくのみおもひ出できこえ給ふ。
 藤壺への追想は脈々と続けられてゆく。

〈若菜上・二七三 光源氏四十賀の折〉

乙女以後開けてくる六条院世界において紫上は「春のうへ」、「南のうへ」として榮花をほしいままにする。「梅の香も、御簾のうちの匂ひに吹きまがひて、生ける仏の御国」かと思われる春の御殿で、「さすがにうちとけてやすらかに住みなし」〈初音・三七七〉ている人、玉鬘十帖でのそれはとくに美麗であり、まさに六条院の花である。しかし第一部前半のはじめにおかれたあの場面を重ね合わせるとき私はその姿に砂上の樓閣を見るようなむなしさを禁じえない。その姿が花やかであればあるほど実体のない空虚さを覚えてしまうのである。新春そうそう明石上のもとに泊った光源氏から、面がくしに「あやしきうたゝねをして」と言訳をされ「ことなる御いらへも」〈初音・三八三〉せぬ彼女、玉鬘の消息を語りあう右近と彼に「あなわづらはし。ねぶたきに、きゝ入るべくもあらぬ物を」とて御衣して、耳をふたぎ給ふ」〈玉鬘・三五八〉人、そして折々の程よい嫉妬に燃える人。それらは光源氏の愛のすべてを受け、陽気で明るく、夕霧の巻の雲井雁を思わせるような屈託のない存在でしかなく、ちょうど初期の子供っぽい愛らしさの延長上にあるともいえよう。もちろんこうした形象のみではなく、光源氏夫人としてもっと慎重に扱われている場合もあるが、しかし結局彼女は形代にすぎなかった。あわれなほど明瞭な形代である。ゆかりにより彼の精神が完全に救われていたとしたら朝顔や梅壺女御等の高貴な人々へ、そして何よりも女三宮へのゆかしみなど招来するはずはなかったであらう。光源氏の物語は第一部の前半、藤壺への非充足の愛が悲しみの美学の中に語られたが、後半もゆかりによる完全な充足はなく、やはりそれが語り続けられたのである。つまりゆかりによる真の救済はなかったのである。

四

第二部に入り紫上造型の筆は一変する。女三宮の降嫁を契機とし、⁽¹⁷⁾真の苦悩を背負った人間として内面深く描出され永遠の女性として昇華する、という道程は従来からとかれていた。たしかに第二部の彼女は内面形象のうえで飛躍的進歩をとげこれまでの「春のうへ」というイメージとはかなり異質な面が追求される。正妻の降嫁に際しての自らを否定した自虐的なまでの生き方にはかつての愛らしく嫉妬心にもえた女君の面影はなく、光源氏をして「いとゞありがたし」へ若菜上・二四七と敬服させるのみである。すなわちここで紫上はゆかり、もしくはそれ以上の理想的人格として再認識されたことになる。

(1) さし並び、目馴れて見たてまつり給へる年頃よりも、対のうへの御有様ぞ、なほありがたく「我ながらも、おほし立て、けり」とおぼす。一夜のほど、あしたの間も、恋しく、おぼつかなく、いとゞしき御心ざしのまさるを、「など、かくおぼゆらん」と、ゆゝしきまでなん。

〈若菜上・二五六〉

という降嫁後まもなくのころをはじめ、

(2) 何事につけても、もどかしく、たど／＼しきことまじらず、ありがたき、人の御有様なれば、「いと、かく具しぬる人は、世に久しからぬためしもあるを」と、ゆゝしきまで思ひ聞え給ふ。さまざまなる人の有様を、見集め給ふまゝに、「とりあつめ足らひたる事はまことに類あらじ」とのみ思ひ聞え給へり。

〈若菜下・三五六〉

(3) 君こそは、さすがに、隈なきにてはあらぬ物から、人により、事に従ひ、いとよく二筋に、心つかひはし給ひけれ。更に、こゝら見れど、御有様に似たる人は、なかりける。

〈若菜下・三六一〉

(4) 限りもなくらうたげに、をかしげなる御さまにて、いとかりそめに世を思ひたまへる気色、似る物なく心苦しく、すゞろに物悲し。

〈御法・一八一〉

等、死に至るまで折にふれてはくりかし再評価されてゆく。「ありがたし」「類なし」「似るものなし」「似たる人

なし」ちようどかつての藤壺の、唯一無二、完全無疵の理想性そのものであり光源氏はまさに藤壺にかわりうる人を得たわけである。

それでは彼はここに至って藤壺への思いを紫上によって満たされ、その非充足の愛を完全に充足させることができたのであろうか。紫上の理想性を再評価することにより彼は眞実救済されたのであろうか。――

いや、第二部世界においても光源氏の魂はたえて満たされることはなかったのである。それは藤壺への愛とのゆかりの紫上とのかかわり、ということではない。第二部の世界まで藤壺の思いが生きていたことはさきにも見た通りであるが（若菜上・光源氏の四十賀の折、幻の巻・明石上との会話等）、ここではそれとは別次元のことである。すなわち紫上個人の問題なのである。

紫上がこうした理想性を光源氏世界の中に次々と具現して見せたこと、それは女三宮の六条院降嫁という事件を契機としてのことである。すなわち彼は降嫁受諾と引きかえにその理想性を手にしたのである。いや手にしたというより見出したに過ぎないのであるが。つまり彼は久しい妻の中に珠玉の輝きを発見しながらそれを自らの手中に収め、その獲得の喜びにひたることは許されなかったのである。なぜならば彼は最愛の人の自らへの愛と信頼を自身の手でふみにじりそこなってしまったからである。そしてそのことを明確に自覚していたからである。第二部での光源氏の最大の苦しみ、それは女三宮の期待はずれでも彼女の不倫でもなく、何よりも紫上に対する背信への自責であつたはずである。女三宮との密事を示す柏木の文を手にして彼は次のように心象を綴る。

かくばかり、又なきさまにもてなし聞えて、内々の心ざし引く方よりも、いつくしく、かたじけなきものに、思ひはぐ、む人をおきて、かゝることは、「更に類あらじ」と、爪はじきせられ給ふ。
 〈若菜下・三九五〉

光源氏にとってこの事件の最大のショックは女三宮の過失そのものより「内々の心ざし引く方（紫上）」をさしおいてまで、つまり最愛の人に彼への不信と忍従を強いてまで正妻としてあがめてきたはずのその人が彼の期待を見事に裏切つたことであつたのである。

女三宮の降嫁を承引した事情には種々の経緯が考えられるが、結果的には紫上を藤壺のすべてを充足させる人格として認めていかなかったことになる。紫上ほどのゆかりを得ながら、親王の娘とはいえないものはかない生いたちの彼女とは格段の差のある、先帝鐘愛の皇女——しかも藤壺のもうひとりゆかりである人——に対する好奇心がこの不自然な結婚を受諾させる何よりの原因であつたのである。が、とにかく光源氏の側には紫上を愛しながらも、それとはまた別に「同じゆかりへの憧れ」という自分なりの説得性があつたわけであるが、彼女の側にはそれが無い。

かこつべき故を知らねばおぼつかないかなる草のゆかりなるらん

〈若紫・二三〇〉

という初めての贈答の際のいぶかしみを解くこともなく歳月を経た紫にとつては女三宮に手繰られるえい、いの意味など知るよしもなく、その背信に対する衝撃は彼の想像をこえるものがあつたはずである。

。かく、空より出で来にたるやうなる事にてのがれ給ふかたなきを、

〈若菜上・二四〇〉

。おのがどちの心よりおこれる懸想にもあらず、塞かるべき方なきものから

〈若菜上・二四〇〉

とひたすら夫を信じ許容しようとしながらも、また、

(5) 「さらば、かくこそは」とうち解け行く末にあり／＼と、かく、世の聞き耳も、なのめならぬ事の出で来ぬるに、おもひ定むべき、世の有様にもあらざりければ、今より後も、うしろめたくぞ、おぼしなりぬる。

〈若菜上・二四九〉

という不信感を抱かざるをえない。賢木の巻「いと、らうたげにて、あはれにうち頼み聞え」(三八七)で光源氏の発心の絆ともなつた、そのままの状態で時を経た彼女にとつてこの感懐は以後の精神生活をむしばむ決定的要因となるのである。たとえば、朱雀院の出家後、里に戻つた朧月夜との逢瀬をはかつて、末摘花の病氣見舞と称して外出の口実をつける彼に対して、

(6) いといたく、心げさうし給ふを、れいはさしも見え給はぬあたりを、(末摘花)「あやし」と見給ひて、おもひ合はせ給ふ事もあれ

ど、ひめ宮の御ことの後は、何事も、いと、過ぎぬるかたのやうにはあらず、すこし隔つる心添ひて、見しらぬやうにておはす。

〈若菜上・二六〇〉

さらに、その帰りを待ちうけた折も、

(7) いみじくしのび入り給へる、おほん寝たれのさまを、待ちうけて、女君、「さばかりならん」と、心得給へれど、おぼめかしくもてなしておはす。中く、うちふすべなどし給へらんよりも、心苦しく、「など、かくしも、見放ち給へらん」と、おぼさるれば、

〈若菜上・二六四〉

あの事件以来、すべてかつてのようではなく、「すこし隔つる心」が添うようになった紫上は光源氏の動静にいたずらに心を乱すようなことはしなくなっていた。あえて相手を無視することは非力な彼女に許されたたった一つのささやかな抵抗であったかもしれないが、彼にとつてはなまじの嫉妬心の発動―うちふすべ―などは比較にならぬ苦しみであり、孤独であり、悔恨の思いを新たにさせるよすがであった。こうした彼女の心情の亀裂は女三宮の六条院への降嫁という時点のみならず後年に至つてさらに決定的なものとなるのである。

(8) 対のうへ、かく年月にそへて、方々にまさり給ふ御おほえに、(女三宮の)「わが身は、たゞ一所の御もてなしに、人には劣らねど、あまり年積りなば、その御心ばへも、つひに衰へなん。さらむ世を見果てぬさきに、心とそむきにしがな」と、たゆみなくおぼしわたれど、

〈若菜下・三三五〉

(9) 「の給ふやうに物はかなき身には過ぎにたるよその思はあらめど、心に堪へぬ物嘆かしさのみうち添ふや、さは、みづからのいのりなりける」とて、残り多げなるけはひ、恥づかしげなり。「……さきくも聞ゆる事、(出家)いかで、御許しあらば」と、きこえ給ふ。

〈若菜下・三五八〉

(10) 「かく、世のたとひに言ひ集めたる昔語りどもにも、あだなる男、色好み、二心ある人にかゝらひたる女、かやうなることを、いひ集めたるにも、つひに、よるかたありてこそあめれ。あやしく、浮きても過ぐしつる有様かな。げにのたまひつるやうに、人より異なる宿世も、ありける身ながら、人の、忍びがたく、飽かぬことにする物思ひ、離れぬ身にてや、やみなんとすらん。あぢきなくもあるかな」など思ひ續けて、

〈若菜下・三六二〉

(8)は年を経て次第に女三宮の花やぎのまさるさまを目にしての心理、(9)(10)は、女棠の後、紫上の生涯を顧みて、光源氏が、

親の窓の内ながら、すぐし給へるやうなる、心安きことはなし。「その方、人にすぐれたりける宿世」とはおぼし知るや。思ひのほかに、(女三宮)この宮の、かく、わたり物し給へるこそは、なま苦しかるべけれど、それにつけては、いとど加ふる心ざしの程を、御身づからの上なれば、思し知らずやあらむ、

〈若葉下・三五八〉

といったとき紫上が口答で答えたもの(9)と、その後の心象(10)である。(8)では光源氏の「心ばえの衰へ」を危惧し、(9)(10)では「あなたは私の庇護のもとで幸いだったのではないか」という問に對しどこか承服できぬ思いを残している。彼にしては珍らしく押しつけがましいもの言いであるが、それを言葉に出してみて紫上の幸いを確認しておきたい——たとえ表面的であっても彼女にそれを認めさせたい、そうしなければいらぬ彼の苦しみと後めたさが言外に響くようである。しかし紫上は彼に快答を与えていない。言葉のうえでも、また心象の面でも。そして彼もまたことばにならぬ彼女の「残り、多げなるけはひ」を痛みをもつて感じとつてゆくしかすべがないのである。

結局自らは浮き草のように、根のないところに咲くかりそめの花であった。それを支える茎は一本しかない。しかもいつ折れるとも限らぬ定めのないものである。この不信と不安に呪縛された紫上は(8)(9)の中で出家を求め、そして(10)で「思ひ続け」たはてに発病する。

この不信感に基づく無常の思ひは、光源氏個人へというより、男性一般、ひいては人間存在そのものへの不安感にかかわるものかもしれないが、とにかくここにはそうした紫の心を必死でとり戻そうとする光源氏のあがきがある。第二部世界の彼の非充足の愛は身分、外況という宿命的制約によつた藤壺へのそれとは異なり、自らの手で意志的に失つた紫上への愛の回復を求めての彷徨であった。失われたものをとり戻そうとすればするほどその対象は以前にも増して燦然と輝く。が、その輝きはかつてのように二人の心を一にして手に近くみることはできず、あくまで失われたものとして遠くより残照を臨むしかすべのないものであり、そこに光源氏の二つ目の非

充足の愛があつたわけである。

ところで紫上は光源氏の愛を完全に拒絶しそれを認めなかつたのか、という決してそうではない。彼の献身に對しそれを許容し応えるだけの心は十分にもちあわせている。しかしそれはこれまでの愛、——光源氏にすべてを託し、その愛に身を委ね信じきつてゆくこと——とはやや様相を異にする面がある。それは「らうたげにうち頼み聞える」女君ではなく、自らの過失に苦しみ必死にそれを贖おうとする夫へのある種のいたわり、やさしみ、そうした慈愛をこめた女君への転身なのである。たとえば、発病後まもなく死の誤報が流れたとき、蘇生後の病床で光源氏の悲嘆のさまを目のあたりにした彼女の心象は次のようにある。

（田なきやうなる御心ちにも、かゝる御けしきを、心苦しく見たてまつり給ひて、「世の中になくなりなんも、我が身には、さらに、口惜しきこと、残るまじけれど、かく、おぼし惑ふめるに、むなく見なされたてまつらんが、いと、思ひくまなかるべければ」思ひ起して、御湯など、いさゝか参るけにや、六月になりてぞ、時々、御髪もたげ給ひける。

〈若菜下・三八六〉

かつて藤壺は冷泉帝誕生の際、「弘徽殿などの、うけはしげにの給ふ」〈紅葉賀・二八二〉ことを聞き少しづつ氣力をとり戻したことがあつたが、⁽¹⁹⁾ここではそれとは対照的に相手の愛に報いようとする静かな思いがこめられている。そして、御法の巻、その死を語る巻のはじめにも、

（身づからの御心ちには、「此の世に飽かぬことなく、うしろめたきほだしだに、まじらぬ御身なれば、あながちにかげとどめまほしき御命」ともおぼされぬを、「年頃の御契りかけ離れ、思ひ嘆かせたてまつらむこと」のみぞ、人知れぬ御心の
中にも、物あはれに思されける。

〈御法・一七三〉

ここで紫上は「此の世に飽かぬことなく」と言い、さきざきの「人の、忍びがたく、飽かぬことにする物思ひ、離れぬ身にて」〈若菜下・三六二〉「心に堪へぬ物嘆かしさのみうち添ふや」〈若菜下・三五八〉という表白と一見矛盾するようであるが、これは前に光源氏の言った「その方（光源氏の傘下で平穩に過ごした）こと、人にすぐれたりけ

る宿世とはおぼし知るや」(若菜下・三五八)に対するものである。内面の苦悩はともかく、彼の庇護のものと生涯は幸いであった。その意味での幸いを久しい病を経た今の時点で彼女は肯定しようとしているのかもしれない。がともかくわが命を「かけとどめまほし」くも思わぬ紫には光源氏を残して嘆かせること、その氣遣いのみが生へのわずかな支えになっていたのである。

紫上の光源氏に対する愛、それは自らの死をいたみ没後にも限りなく嘆くであろう人へのやさしいいたわりと同情の思いである。自身の心で招いた背信に彼女の死後までも苦しみ続けるはずの光源氏に対し、その罪をいやし静かなまなざしを向ける母や姉のようなイメージの中に綴られる愛である。愛というよりいたわり、なつかしみの心であり、それがあの事件を経てもかろうじて光源氏とつながることのできる、孤独と不信の中で模索したたった一つの道であったのかもしれない。

第二部の紫上造型はゆかり、形代をこえた一個の理想的人格を追求するものであった。が、それは藤壺のゆかり、藤壺とのかかわりの中にあるのではなく全然別個の人格であり、光源氏は紫上の中に藤壺から完全にとぎ放たれた次元での永遠の思慕の対象を見出したのである。しかしながら彼はそれを女三宮降嫁という紫上への絶対的背信を代償として得たのである。紫上は光源氏の献身と愛を認めようとしたかもしれない。最後には母のようにその傷ついた心を暖かく包もうとさえた。が、彼の方には救いはなかった。非充足の愛の悲しみがその没後もとどまることなく残るのみなのである。

五

紫式部が源氏物語の中に辿ってきた愛の系譜、それは藤壺から紫へと手繰られてきた永遠の非充足の愛であった。それではこれは以後の物語世界にどのように受け継がれてゆくのであろうか、光源氏亡きあとの薫の場合につ

いて宇治の物語にふれておきたい。

薫の大君に対する愛には何の障害もなかった。人妻、継母、等という所与の制約はなく、八宮の没後は後見者もなく薫との結婚にはごく自然の道が開かれていたはずである。が、その愛は成就しなかった。外的制約がなかったかわりに大君という女性の強烈な意志があったからである。支配者の意のままに自らの意志をもたぬよう造型されることの多い作り物語のヒロインとしては特殊な存在である。

大君に薫の愛を拒絶させたもの、それはこれまでも種々とかれてきたように、男女の愛というもののへの不信感、絶望感であり、それを意識的に否定する思念であった。⁽²⁰⁾紫上がその晩年、一応の順境にありながらも味わい続けねばならなかった苦しみ、それを確実に受けとめたところに大君造型の始発があったのである。⁽²¹⁾

薫が彼女に求めた理想性は高貴さ、名聞といった外的なものより、内面の深みにあった。これは柏木との基本的相違である。折にふれての大君の、よしあり、あてなる、つゝまじげな趣きに薫はごく自然に母や姉を思慕するようにひかれてゆく。橋姫の巻の月光のもと垣間見も権本の巻末のそれもその人の内面をより深く知るためのプロセスである。

「いま少しおもりに、よしづき」〈橋姫・三一四〉「いま少し、あてに、なまめかしさまさり」「け高う、心にくきけはひ」〈権本・三七七〉の見え、さらつと落ちた髪に細いやせやせの手つきの大君の姿は、「いみじうらうたげに匂ひやか」〈橋姫・三一四〉で、ゆたかな髪にふくよかで花々とした中君の美しさをこえて薫の心にうつるのである。彼は花やぎの中君に対し、すでにさかりを過ぎ開けの美に向かい、⁽²²⁾内的にもそれに見合ったものをもつ大君の方に理想性を求めたのである。そしてそれは女三宮の場合のように途中で挫折することなく、最後まで高められ続け死に臨んで、

「すこし憂きさまをだに、見せ給はゞなむ、思ひさます節にもせん」と、まもれど、いよゝゝ、あはれげに、あたらしく、
をかしき御有様のみ見ゆ。
〈総角・四六一〉

と、完全な理想性に昇華し、以後も彼の心に永遠の非充足感を残すことになるのである。

一方の大君は薫個人を厭うてゐるわけではない。むしろ彼があまりにも過ぎた理想人であることを十分認めたくて彼を受け入れることはできないのである。⁽²³⁾

(1)この人の御さま、なのめに、うち紛れたる程ならば、かく見馴れぬる年頃のしるしに、うちゆるぶ心も、ありぬべきを。恥づかしげに、見えにくき気色も、中／＼いみじくつゝましきに、わが世は、かくて過ぐし果てゝむ。

〈総角・三九五〉

(2)われもやう／＼、さかり過ぎぬる身ぞかし。鏡を見れば、やせ／＼になりもて行く。……恥づかしげならんに、見えんことは、いよ／＼、かたはら痛く、いま一年、二年あらば、おとろへ、まさりなん。はかなげなる、身の有様を。

〈総角・四二六〉

完全なる貴公子に対して、ものはかない自らの身を恥ずるゆえの一種の自虐的な思念であるが、これは中君の匂宮との結婚による苦しみにより一層強められ、「みづからだに、猶かゝる心、思ひ加へじ」(総角・四三〇)とその意志が固められてゆくのである。さらに、

(3)いとゞ、かゝるかたを、憂き物に思ひ果てゝ、「猶、ひたぶるに、いかで、かく、うち解けじ。『あはれ』と思ふ人の御心も、かならず『つらし』と、思ひぬべきわざにこそあめれ。われも、人も、見おとさず、心違はでやみにしがな」と思ふ心づかひ、深くし給へり。

〈総角・四三二〉

(4)此の君の、かく添ひゐて、残りなくなりぬるを、今は、もて離れん方なし。さりとて、かう、おろかならず見ゆる心はへへの、見劣りして、我も人も見えんが、心安からず、憂かるべきこと。もし命、しひてとまらば、病にこつつけて、かたちをも変へてん、さてのみこそ、長き心をも、かたみに見つべきわざなれ」と、思ひしみ給ひて、

〈総角・四五八〉

と、結婚に対する意識そのものに変化はないが、さきに見た大君の側からのやや一方的な自卑と自虐に対し、ここでは薫への不信感が——もちろん彼個人へという意味ではないかもしれないが——婉曲な形で表出されてくるのである。観念、想像の世界から匂宮を迎えるという現実の世界に引き出された結果の必然的道筋であるうが、大君のこうした決意は、さらに彼女の没後、中君の心象の中にあたらたな実感となつて肯定されてくる。折にふ

れ、大君を忘れかねている薫の姿に接しその誠意につくづくとした感慨を覚えながらも中君の心には不思議にさめた思念が定着するのである。たとえば匂宮と六君との婚儀を間近にしたころの心境を見ると、

(5) 故ひめ君の、いと、しどけなく、物はかなき様に、何事をも、思し、のたまひしかど、心の底の、づしやかなる所は、こよなくも、おはしけるかな。中納言の君の、いまに忘るべき世なく、嘆き渡り給ふれども、もし、世におはせましかば、又、かやうに、おぼす事もありもやせまし。それを、いと深く、『いかで、さはあらじ』と、思ひ入り給ひて、とざまかうざまに、もて離れん事を思して、『かたちをも、変へてむ』と、し給ひしぞかし。必ず、さる様にてぞおはせまし。今思ふに、いかに、重りかなる御心掟てならまし。

〈宿木・四一〉

また、女二宮との花やかな婚儀の後もさらに大君を偲ぶ心を深くする薫を目のあたりにしても、

(6) 「おはせましかば」と、くちをしう、思ひ出で聞え給へど、「それも、わが有様のやうに、うらやみなく、身を恨むべかりけるかし。何事も、数ならでは、世の人めかしき事もあるまじかりけり」と、おぼゆるにぞ、いとど、かの「うち解け果てどやみなむ」と、おもひ給へりし御心おきて、猶、殊に重くしう、思ひ出でられ給ふ。

〈宿木・一一三〉

いかに薫が大君を忘れかねていようと、もし彼女が存命で彼のもとに嫁していたらやはり「又かやうに」「うらやみなく」自分と同じ物思いをしたことであろう。それが中君の確信であった。しかも「かばかりめでたげなる事どもにも、慰まず、わすれ難う思え給ふらん、心深さよ」〈宿木・一一三〉と薫の真心を十二分に認めてのうである。彼の大君への愛はかくして二重に否定されてしまうのである。薫がいかに誠をつくそうと、それは大君のいない世界のことではない。つまり実体のない架空の世界での純愛にすぎないのである。そのことを大君も中君も確信している。それに気づかぬのはむしろ薫自身なのである。作者はそう言いたいのではなからうか。かくして何の制約も伴わなかったはずの薫の大君への愛は女君の側から幾重にも否定され、そしてその満たされぬ思いを抱いてさらにいくつかの非充足の愛をつむぎ出してゆくのである。それはゆかりの人々——中君、浮舟——とのかかわりである。

大君はかつて中君を薫にと望んだことがあった。しかし彼は拒絶する。もちろん薫は中君の存在を完全に否定

していたわけではなく、それはあの「岩瀬の杜かきの呼子鳥めいた」(早蕨・一五)夜、中君を目の前にして、

(7) これをも、「よその物」とは、え思ひ放つまじけれど、なほ、本意のたがはん、口惜しくて、『うちつけに、浅かりけり』
とも、おぼえたてまつらじ。此の一ふしは、猶、過あやして、つひに、宿世のがれずは、こなたさまにならんも、何かは、
他人のやうにやは。
〈総角・四〇五〉

といっていることにも明らかである。薫はひとまず心をおさめ、⁽²⁴⁾ どうしても大君が得られぬ時は中君を「何かは他人のやうにやは」と思うのであり、ゆかりとしての彼女をある意味で容認しているのである。もしそうだった場合、恐らく薫は中君によってある充足を約束されたことであろう。それは大君の没後、中君に寄せる綿々とした慕情の中にも十分に予測することができる。が、ここで考えねばならぬことは中君がそれほどまでに薫の心をいたました理由が大君がすでに亡き人であるということと、何よりも、彼女の意に反して中君を匂宮の夫人にしたててしまった、という自らの行為に対する無念の思いにあることである。姉なき後、中君が未婚のままに宇治に留まっていたとしたら彼はゆかりの人となみなみならず愛したことであろう。しかし、わが手でむぎむぎと、しかもかなり卑劣な手段を弄してまで人妻としてしまったという道程にみるほどの執着はなかったことであろう。

早蕨から宿木、東屋の巻々、薫は悶々とした中君思慕に身をさいなまれてゆく。この間彼女は完全な大君のゆかりとして、薫の、姉に対する非充足の愛を充足させうる資格を付与されている。が、それは彼自身の手によって作り出された、中君によせる新しい非充足の愛の始発でもあったわけである。

(8) こゑなども、「わざと似給へり」とも思えざりしかど、怪しままで、「たゞ、それ」とのみ思ゆるに、〈宿木・四九〉
(9) いと、あてに、なまめかしき気色まさりて、むかし人にもおほえ給へり。ならば給へりし折は、とりくにて、更に、似給へりとも、見えざりしを、うち忘れては、ふと、「それが」と、思ゆるまでかよひ給へるを、
〈早蕨・一二〉

と正身の没後、日を追って知る中君の酷似、それにつけても「心から、よその物に見なしつると思ふに、いと悔

しく」(早蕨・一九)「かく、慰め難き形見にも、げにこそ、かやうにも、あつかひ聞ゆべかりけれ」と悔しきこと、やうく、まさりゆけど」(早蕨・一五)と臍はらをかむ思いを禁じえない。そしてこの感懐は日を経るに従って狂おしいものとなつてゆく。

⑩「かの人を、空しう見たてまつりなしてし後、思ふには、御かどの『御むすめを、賜はむ』と、思し控つるも、嬉しくもあらず、『この君を得ましかば』と、思ゆる心の、月日に添へてまさるも、たゞ、『かの御ゆかり』と、思ふに、思ひ離れ難きぞかし。兄弟と言ふ中にも、限りなく思ひかはし給へりし物を、今はとなり給ひにし果てにも、『とまらむ人を、おなじ事と思へ』とて、『よろづは、思はずなる事もなし。たゞ、かの、思ひ控てし様をたがへ給へるのみなん、口惜しう、恨めしき節にて、この世には残りぬべき』と、のたまひし物を。あまがけりても、かやうなるにつけては、『いとゞ、つらし』とや見給ふらむ」など、つくぐと、人やりならぬ独寝し給ふ夜なくは、はかなき風の音にも、目のみさめつゝ、来し方、行く先、人の上さへ、あぢきな世を、思ひめぐらし給ふ。

〈宿木・四四〉

⑪言ひ知らずらうたげに、心苦しき物から、用意深く、恥づかしげなるけはひなどの、見し程よりも、こよなく、ねびまさり給へりけるなどを見るに、「心から、よそ人にしなして、かく、安からず物を思ふ事」と、くやしきにも、又、げに、音は泣かれけり。……いにしへを悔ゆる心の忍びがたさなども、いと、しづめ難かりぬべかめれど、昔だに、ありがたかりし、御心の用意なれば、なほ、いと、思ひのまゝにも、もてなし聞え給はざりけり。

〈宿木・七五〉

こうした彼の苦しみは中君の出産を契機としてこれ以上追求されることは少なくなるが、自身で招来したことでだけにその満たされぬ思いはとどまるところを知らぬものがある。中君への愛、それは薫自身が作り出した「人やりならぬ」むなしいものであり、宇治の世界で得た二つ目の非充足の愛であつた。

六

薫が宇治の世界で遭遇するもうひとつの果たされぬ愛、それは浮舟へのそれである。

中君は薫のあやにくない思いを第三者に転嫁させるべく浮舟の存在を告げる。しかしさきの中君の場合と同じく「ゆかしくなりたれど、うちつけには、ふと、うつらむ心地はたせず」(東屋・一五八)という慎重さである。結局彼は大君の形見として彼女を宇治に迎えるが、それ以前にはじめて浮舟を垣間見た時、

〈宿木・一二五〉

(12) これを見るにつけて、たゞ、それと思ひ出でらるゝに、例の、涙落ちぬ。

(13) あはれなりける人かな。かゝりける物を、今まで尋ねも知らで過ぐしける事よ。……これは、知られたてまつらざりけれど、まことに、故宮の御子にこそは有りけれ」と、見なし給ひては、限りなう、あはれに、嬉しく、おぼえ給ふ。

〈宿木・一二五〉

ちようど光源氏が若紫を見初めたときと同じ趣きであるが、実際に宇治に伴つてみた折には大君への思いをこめてかなりさめた視線の中に見据えているのである。

(14) 君も、見る人は憎からねど、空の気色につけても、来し方の恋しさまさりて、山深く入るまゝにしも、霧、たちわたる心地し給ふ。

〈東屋・一九三〉

(15) つましげに見出したしたるまみなどは、いとよく、思ひ出でらるれど、おいらかに、あまり、おほどき過ぎたるぞ、心もとなかめる。「いと、いたう、こめいたる物から、用意の、浅からず物し給ひしはや」と、なほ、行く方なき悲しさは、むなしき空にも、満ちぬべかめり。

〈東屋・一九四〉

宇治への道すがら、かたわらに浮舟をおきながら薫の心には晴れぬものがある。そして、

(16) おおし着きて、「あはれ、亡き魂や、やどりて、見給ふらむ。誰によりて、かく、すゞろに、惑ひありく物にもあらなくに」と、思ひ続け給ひて、おりては、少し心しらひて、立ち去り給へり。

〈東屋・一九四〉

と、ゆかりの地に至りさらにそれは確実なものになり、思わず浮舟のものを立ち離れてしまう。手の中にとらえた浮舟は大君への慕情を新たにすればかりで薫にとつて何ら充足感を与えるものではない。逆に正身への非充足の愛をむなしくかきたてるよすがでしかないのである。中君によせるゆかりの意識とはまさに対照的であるが、劣り腹という出自の違いとともに浮舟には薫との愛をはばむ何の制約もないことも彼にさめた視線をもたせる原

因であつたらう。

ゆかりとは縁、つながりの意に用い、容貌の類似ということが大きな要因であるといわれるが、彼は中君(25)についてしばしばその点を強調する。生前はともかく大君なき今、「たゞ、それか」と思うほどということを繰り返す。ところが中君は浮舟と対面した折、亡き姉との酷似につくづくと感じ入って次のように思う。

〔大君〕故姫君は、宮の御方さまに、我は、母上に似たてまつりたる」とこそは、古人でも、言ふなりしか。げに、似たる人は、いみじき物なりけり。
〔東屋・一七五〕

つまり実際には中君より浮舟の方が大君に似ていることになり、ゆかりとしての資格は十分に備えているはずである。にもかかわらず浮舟はこの時点で薫の思いを満すことはほとんどできなかったのである。もちろん彼女がゆかりとして全く成長しなかつたわけではなく、時には、

幽恋しき人に、よそへられたるも、こよなからず、やうく、物の心知り、宮こ、馴れゆく有様のをかしまも、こよなく、見勝りしたる心地し給ふに
〔浮舟・二二三〕

と評されるのであるが、その直前には「猶、そのかみの事の、たゞ今の心地して」とあつて、常に大君の影の中にかすかに場を得ているにすぎないのであり、始発に見た浮舟への視線は以後の基調として変わることはない。そして、そのさめた視線が後に匂宮との出会いの中で、「時の間も見ざらむは死ぬべし」といつて情熱的言辞を尽くす人(匂宮)に対し、「心ざし深しとは、かゝるを言ふにやあらん」(浮舟・二二二)と浮舟に思わせてしまう伏線にもなっているのである。すなわちその視線が後の悲劇の間接的原因にもなっているわけであるが、皮肉なことに薫はここでもまた浮舟を失うまでそのことに気づかないのである。浮舟を失った後、薫の彼女への思いは従来とはやや異なつた方向に転じ、浮舟は新しい姿で薫の中に生きはじめることになる。

。つくぐ、とうち眺めつゝ、「宮を、『珍しく、あはれ』と、おもひ聞えても、わが方を、さすがに、おろかに思はざりける程に、いと、あきらむる所なく、はかなげなりし心にて、この水の近きを頼りにて、思ひ寄るなりけむかし。わが、こゝ

に、さしはなち、据ゑざらましかば、いみじく憂き世に経とも、いかでか、必ず、深き谷をも、求め出でまし」と、「いみじう憂き、水の契りかな」と、この川の、疎ましう、思さるゝ事、いと深し。

〈蜻蛉・三〇四〉

。「宮のうへの、のたまひ始めし、『人形』と、つけそめたりしさへ、ゆゝしう、『たゞ、わが過ちに、失ひつる人なり』と、思ひもて行くには、……」と、万に、いとほしく思す。

〈蜻蛉・三〇五〉

自分が「こゝにさしはなち、据ゑざらましかば」という後悔、それは遠隔の地という地理的なことのみではなく、いつか近くと思いつつも外聞や中君の思惑を考慮して心ぬるく過ごし、ゆかりとしての価値をいとおしみ愛を尽くすことをしなかつた、ということなのである。浮舟は紫上と異なり自らが亡き姉の身分違いの形代であることを十分にわきまえているはずである。それゆえにこそ薫の愛の薄さは彼女を孤独の世界に追いつめたのである。うが、しかし、一方でまた彼女自身も「はじめより薄きながら、ものどやかに物し給ひし人の、この折かの折なと思ひいづるぞ、こよなかりける」へ手習・三八三と、その薄さ、淡さの重みに気づいたのはやはりすべてを失つた後なのである。すなわち薫がゆかりとしての浮舟の重みに気づいたのと同じ時のことである。

薫は彼女の供養をしても、母への贖罪の意味で兄弟たちを後見しても

。「はかなくても、やみぬるかな」と、あはれに思す。

〈手習・四〇九〉

。なほ、いふかひなき事を、忘れ難く思す。

〈蜻蛉・三一一〉

。川近き所にて、水を覗き給ひて、いみじく、泣き給ひき。……言にあらはして、の給ふ事は、少なけれど、たゞ、気色には、いと、あはれなる御さまになむ、見え給ひし。

〈手習・四〇五〉

と今さらのように失われたものへの愛惜を深める。薫は浮舟の失踪後、匂宮を見舞いその憔悴しきった姿に接して「いみじくも、思したりつるかな。いとはかなかりけれど、さすがに高き、人の宿世なりけり」(蜻蛉・二九三)と当代一の貴公子にこれまで思われた浮舟の宿世の高さに深い感慨を否めないが、それに次いで、自身について

囚われも、かばかりの、身にて、時の帝の御むすめを、持ちたてまつりながら、この人の、らうたく思ゆる方は、おとりやはしつる、まして「いまは」と、思ゆるには、心を、のどめむ方なくもあるかな。
 〈蜻蛉・二九四〉

とあり、「ましていまは」以下の思いは痛切である。そして、蜻蛉の巻の末近く、大君、中君と宇治のゆかりの人々との苦悩の愛を尽くした自らの青春を顧みて、

四 「さし次ぎには、浅ましくて亡せにし人の、いと、心幼く、とゞこほる所なかりける、軽くしさをば、思ひながら、さすがに、「いみじ」と、物を思ひ入りけむ程、……おもひ出でられつゝ、『重りかなる方ならで、たゞ、心安く、らうたき語らひ人にて、あらせん』と、思ひしには、いと、らうたかりし人を、思ひもて行けば、宮をも、おもひ聞えじ。女をも『憂し』と思はじ、たゞ、わが有様の、世づかぬ怠りぞ」など、ながめ入り給ふ時く、多かり。
 〈蜻蛉・三二四〉

薫は匂宮をも浮舟をも責めようとはせず、そうした結末を招いたすべての責任を自らに帰している。ここで浮舟は、「大君、ゆかりの中君、そしてさしつぎの人」としてはじめて薫の愛の対象として物語の中に場を得ているのである。巻末の「ありと見て」の歌の中にも、「手にはとられず」過ぎた人々に対して、手にとりながら「ゆくへも知らず消え」た人として、宇治のゆかりの一員に確実に数えられているのである。

浮舟は薫の前から姿を消してはじめて彼の非充足の愛の対象となりえた。ことに出家の身への愛執は「住むらん山里は、いづこにかあらむ」へ手習・四一三と哀切のきわみである。薫はなれば自らの手で浮舟を失ったことよって宇治の世界における最後の非充足の愛を得たのである。

七

源氏物語の愛の美学はその基調を非充足性への志向に求めることができる、私はそうはじめに書いた。そしてその愛の系譜をたどしく辿ってきた今、あらためてそのことが確認されたような気がする。

この物語の中には多様な愛の世界が描かれている。その花のひとつひとつはそれぞれに美しい。ひとつとして同じものはない。が、その多くに共通する色、それは悲しみの色である。満たされることのない愛、果たされぬ愛、非充足の愛の系譜である。

はじめにみた諸々の愛、そして後にみたそれらの凝縮または象徴ともいえる主人公たちの愛、それらは堪えがたい苦しみといたましさの中に燃焼され各々の輝きをこめて消えてゆくが、悲しみのきわみに咲く花は非常な美しみがあつた。

非充足の思い、それは仏教でいう八苦の中の一つの「求不得苦」の苦しみにあたる。とらえようとしてとらえられぬものを求めてさまよう人間の苦であるが、不可能を可能にすべくひたむきに生きる人々の姿にはむなしさの中に時として透明な美しさが感ぜられる。この悲しみの美学ともいふべきものは源氏物語に限ったことではなく、白鳥説話以来の愛の文芸の伝統である。竹取のかぐや姫も、宇津保のあて宮も、伊勢の后たちもみなひたむきな主人公たちの非充足の愛の対象であつた。それぞれのヒロインたちに共通したもの、それは異郷の人、天上界の人、また地上の人であつても高貴な后たちや構想上そう予定されている人々であり、物語の始発から人の手の届かぬ存在である。すなわちその愛は挫折と不毛を初めから約束されて語りはじめられたのである。

しかし源氏物語に描かれる非充足の愛はこれと全く同じではない。もちろん藤壺や女三宮には所与の制約があり、形のうえでこれにあたる。しかしそのほかに、そうした外的制約がないにもかかわらず人々の意志で、とくに男主人公側のそれで非充足の愛を招来する場合が少なくない。紫上も、中君も、浮舟も、ある意味で大君もそうであつた。男主人公たちは不覚にもその時点での愛の充足に気づかず、自らの手で失なつてみてはじめてその重みに気づき非充足の愛の世界に彷徨し苦しみをかき立てゆく。しかしまた皮肉なことにそれは彼らの手を放れてはじめて輝くものであり、一度失われてみないかぎり非充足の愛の美学は生まれえないのである。

ありと見て手には取られず見れば又ゆくへも知らず消えし蜻蛉

蜻蛉の巻のはじめの薫の独詠はまさに源氏物語の愛の美学の象徴ともいえるのである。

- (1) 藤村潔氏「物語の出で来はじめのおや」(『古代物語研究序説』所収 昭和五十二年六月 笠間書院)
- ・中野幸一氏「前期物語論」(『物語文学論攷』所収 昭和四十六年十月 教育出版センター)
- (2) 岡崎義恵氏「源氏物語の美」(岡崎義恵著作集5 宝文館、昭和三十五年七月)
- (3) たとえば藤裏葉の巻の夕霧と雲井雁の恋の成就は次の若菜上巻で朱雀院の女三宮の婿選びの際、夕霧からその資格を奪い、光源氏の悲劇を招く原因の一つとなっている。
- (4) 阿部秋生氏「明石の君の物語の構造」(『源氏物語研究序説』昭和三十四年四月、東京大学出版会 所収)
- ・河内山清彦氏「明石女御の皇子生誕をめぐって」(上)——六条院栄花の確立——(『平安文学研究』第五十九輯、昭和五十三年六月)
- (5) 拙稿「源氏物語における花散里の役割」(『言語と文芸』六十五号、昭和四十四年七月)
- (6) 朱雀院の齊宮女御(梅壺)への愛や夕霧の紫上への思慕など、ともに非常に長い歳月にわたるものである。
- (7) 拙稿「源氏物語におけるプロットの進展——それにかかわる状況設定と人物設定の問題を中心に——」(『平安文学研究』第四十五輯、昭和四十五年十一月)
- (8) 「万葉集」巻一の二十及び二十一「あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る」。「紫ににほへる妹を憎くあらば人妻ゆえにわれ恋ひめやも」
- (9) 斎藤暁子氏は「藤壺試論——愛と拒絶の構造——」(『むらさき』第十輯、昭和四十七年六月)の中で光源氏の姿に接するこの間の藤壺の心理を「過去の暗い怯えの心」として孤独の恐怖感のようなイメージの中にとらえられているが、それもたしかであるうが、ここではあまり暗く考えず光源氏の純愛へのいささかの応え(精神的な面での)というふうにかえたい。
- (10) 木船重昭氏「藤壺宮・光源氏退京以後」(『平安文学研究』第五十輯、昭和四十八年七月)
- ・横井孝氏「藤壺物語の変容——薄雲の巻の一節をめぐって——」(『平安文学研究』第五十三輯、昭和五十年六月)
- (11) 鈴木一雄氏「源氏物語における“ゆかり”について」(『むらさき』第四輯、昭和四十年十一月)「源氏物語における“ゆかり”について(上)」(『言語と文芸』五十五号、昭和四十二年十一月)
- ・横井孝氏「ゆかりの構造——朝顔の巻をめぐって——」(『平安文学研究』第五十二輯、昭和四十九年七月)
- ・広田収氏「源氏物語における“ゆかり”から他者の発見へ」(『中古文学』第二十号、昭和五十二年十月)
- (12) 注11参照。
- (13) 秋山虔氏「紫上の初期について」(『源氏物語の世界』所収 東京大学出版会、昭和三十九年十二月)

- ・大朝雄二氏「紫上の登場をめぐって」(『中古文学』第八号、昭和四十六年九月)
 - ・西木忠一氏「紫上の登場——日もいと長きにつれ、なれば——」(『平安文学研究』第五十輯、昭和四十八年七月)
 - (14) 拙稿「源氏物語の場面描写——一回的端役の効果的な使い方をめぐって——」(『言語と文芸』八十三号、昭和五十一年九月)
 - (15) 秋山 虔氏「紫上の変貌」(前掲『源氏物語の世界』) 所収
 - ・今井源衛氏「紫上——朝顔の巻における——」(『源氏物語講座』第三卷、所収、昭和四十六年七月、有精堂)
 - (16) 清水好子氏「源氏の女君」(増補版、塙書房)
 - (17) 小西甚一氏「苦の世界の人たち——源氏物語第二部の人物像——」(『言語と文芸』六十一号、昭和四十三年十一月)
 - ・鈴木一雄氏前掲書 (注11参照)
 - (18) 今井源衛氏「女三宮の降嫁」(『源氏物語の研究』) 所収、昭和三十七年七月、未来社)
 - ・秋山 虔氏「若菜巻の始発をめぐって」(前掲『源氏物語の世界』) 所収)
 - ・齋藤暁子氏「女三宮の降嫁承引の過程について」(『むらさき』第十五輯、昭和五十三年六月)
 - (19) 清水好子氏前掲『源氏の女君』
 - (20) 秋山 虔氏「源氏物語」(岩波新書)
 - ・河北 騰氏「個性と没個性——宇治十帖の構築法——」(『平安文学研究』第五十二輯、昭和四十九年七月)
 - ・森 一郎氏「宇治の大君と中君」(『平安文学研究』第五十五輯、昭和五十一年六月)
 - ・千原美沙子氏「大君・中君」(『源氏物語講座』第四卷、所収、昭和四十六年八月、有精堂)
 - (21) 森 一郎氏前掲書(注20参照)
 - (22) 間野知子氏「鬮けの美」(『解釈と鏡賞』昭和四十二年五月)
 - (23) 注20参照。
 - (24) 秋山 虔氏「薰大将の人間像」(前掲『源氏物語の世界』) 所収)
 - (25) 注11参照。
 - (26) 森 一郎氏「宇治十帖後半部悲劇の構造」(『中古文学』第二十号、昭和五十二年十月)
- ・文中の引用本文は日本古典文学大系「源氏物語」(一、五) (岩波書店) による。